

高等学校国語科の評価について

徳 本 孝 治

一、高等学校国語科における評価の現状と課題

国立教育政策研究所教育課程研究センターの教育課程調査官である大杉昭英氏は、広島県立教育センターで行った「教育評価」に関する講演の中で、次のように述べている¹⁾。

高等学校の先生方は「観点別評価って何だ」ってよく言われるんですが、指導要録の中に記入欄がないので、観点別評価に留意されることが少ないのです。目標に準拠した評価をするならば、まず分析的な観点別評価をして、それを総括して評定を出すようにしないと本当はできない。そういう意味で観点別評価をとらえてほしいのです。出発点は観点別評価になるということです。

広島県立の高等学校では全校にシラバスの作成が義務づけられており、教科目標や単元目標の設定に関して、現場では検討がなされている。しかし、それを評価と明確に連関させて捉えているケースは、シラバスを見る限り稀であ

る。その原因として、大杉氏の言うように、高等学校における「観点別評価」の立ち後れが考えられる。

更に倉澤栄吉氏は、国語教育における評価の現状を次のように述べている²⁾。

国語科の評価の中で一番遅れているのは、そしてそのために国語教育がさっぱり改善されないのは、結果主義の克服の問題である。評価は学習や指導の末に位置づけられている。学習中の評価——児童生徒が本を読んでいるとき、ものを書いているとき、答えを見出そうとしているとき、などについて突っ込んだ評価を実践しようとならない。

高等学校では実質的にペーパーテストの結果が評価の中心であり、いくぶんか提出物や授業態度の点数を加えて評定が成されるにしろ、指導過程に対する評価の比率は低い。

(ただし、各校の「教務規定」によって異なる。) 倉澤氏の言

うように、「結果主義」的評価が評価の観点も明確にされないままに行われているのが現状であるように思われる。

ここで私が問題とした点は、小中学校の「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）、なお高等学校では既に絶対評価が行われていることになって（導入に向けた）「評価規準」および「評価基準」づくりの動向に比して、高等学校におけるそれが極端に低調であることである。現在の学校現場にはディスクロージャー（情報公開）およびアカウンタピリティー（説明責任）が求められつつあり、評価の根拠についても例外ではないことから、個人レベルではなく学校としての評価の観点の明確化と体系的な「評価規準」および「評価基準」づくりが急務である。また、PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルに基づく授業改善に活用可能な評価を行うために、「評価規準」および「評価基準」に基づいた「指導と評価の一体化」を目指さなければならぬ。

二、問題解決の視点

二の一、「観点別評価」と評価規準の明確化

文部科学省から平成一三年四月二七日に出された通知（一三文科初第一九三号）には、次のような記述がある^{注10）}。

教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」（平成一二年一二月四

日）（以下「答申」という。）を受け、各学校における指導要録の作成の参考となるよう、（引用者中略）それらの指導要録に記載する事項等を取りまとめました。

（引用者中略）

「答申」にもあるように、学力については、知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要があります。これからの児童生徒の学習状況の評価に当たっては、このことを適切に評価できるよう、工夫することが必要となります。また、指導要録は、一年間の学習指導の過程や成果などを要約して記録するものであり、その記録を確かなものにするためには、そこに至るまでの継続的な評価の充実が重要です。このため、これからの評価においては、各学校において、観点別学習状況の評価を基本とした現行の評価方法を発展させ、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を見る評価が一層重視されるとともに、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価が工夫されるようお願いします。それとともに、各学校において、指導と評価の一体化、評価方法の工夫改善、学校全体としての評価の取組が進められるとともに、学習の評価の内容について、日常的に児童生徒や保護者

に十分説明し、共通理解が図られるようお願いします。

引用部は、指導要録記載の評価に関する改善の方向性を示したものである。記述にもあるように、高等学校においても観点別学習状況評価の重視が示されている。また、その観点については（別紙第3別添3）として、次のような観点が示されている¹⁷⁾。

教科		観点	趣旨
	関心・意欲・態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
	話す・聞く能力		自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
	書く能力		自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
	読む能力		表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。
	知識・理解		

高等学校でこの観点を日常的な評価活動に取り入れる場合は、更にそれぞれの学校の特質の応じた評価規準、およびそれに基づいた具体的評価を行うための評価基準を作成し、併せて何を用いて判断するかという評価方法についても検討しておく必要がある。この点が計画段階でも実践段階においても、最も時間と労力を要する部分であり、それを厭えば「為にする評価」となりやすいため、留意が必要であるように思われる。

二の二、「指導」と「評価」の一体化

教育課程審議会答申が示した「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」（平成一二年一月四日）には、次のような記述がある¹⁸⁾。

学校の教育活動は、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、児童生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されている。すなわち、指導と評価とは別物ではなく評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である（いわゆる指導と評価の一体化）。評価は、学習の結果に対して行うだけでなく、学習指導の過程における評価の工夫を一層進めることが大切である。また、児童生徒にとって評価は、自らの学習状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけと

なり、その後の学習や発達を促すという意義がある。

つまり、明確な評価規準によつて、一時間あるいは一單元というまとまりを評価することにより、生徒の学習改善にフィードバックすることが可能となる。また、教師も生徒の状況から指導を振り返ることが可能となり、授業改善にも繋げることができる。これまでも授業中の生徒の状況から授業後に自己の指導を省みることは、教壇に立つ者なら誰しも行つてきている。しかし、P D C A (Plan-Do-Check-Action) サイクルによつて、即時的に評価 (Check) に基づいた改善への行動 (Action) が可能となる点で、これまで以上に授業に対する教師の「自己責任」が問われるようになるものと思われる。

三、評価規準、評価方法の具体的事例

高等学校国語科における評価規準、評価方法の在り方について積極的な研究活動を進めている事例がある。愛知県立総合教育センター研究紀要第九二集に掲載されている、「高等学校国語科における評価規準、評価方法等の在り方に関する研究―『国語総合』の年間学習指導計画の作成を中心に(中間報告)―」^(注6)がそれである。

この研究は、「高等学校新学習指導要領の実施を目前に控え、国語の指導と評価の一体化を更に高める目標に準拠した評価の在り方を探り、各学校の国語の授業と評価の在

り方の改善に資する」ことを目的に、平成一三年度に行われた研究で、次の方法で研究が進められている。

- (1) 評価にかかわる諸答申や通知、国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」、愛知県総合教育センター「評価規準、評価方法等の開発の手びき」、文献等を参考にして、高等学校国語、特に「国語総合」の授業と評価の在り方を研究する。
- (2) (1) を基にして、「国語総合」の評価規準を作成する。
- (3) (2) で作成した評価規準を生かしやすい年間学習指導計画表の形式を工夫する。
- (4) (3) で工夫した年間学習指導計画表の形式によつて、研究協力委員が所属する各学校の生徒の実態等を考慮しつつ、他校の参考となる年間学習指導計画を立案する。
- (5) (4) で作成した年間学習指導計画に従つて、具体的に単元レベルで、研究協力委員の授業実践を通して、指導と評価の一体化の観点について検証する。
- (6) 評価の決定、評定の算出等について見通しを立てる。
- * (5) (6) については、本年度の研究の進捗状況から、今後(来年度)の課題とする。

この研究で興味深いのは、生徒の学習目標が学校間で異

なりがちな高等学校で、「研究協力委員が所属する各学校の生徒の実態等を考慮しつつ、他校の参考となる年間学習指導計画を立案」を目指している点である。そのため、研究協力者が作成する年間学習指導計画のフォーマットを統一し、「学期」「月」「主な領域」「関連領域」「学習内容（単元・教材）」「言語活動例」「配当時数」「具体的な評価規準」「評価方法等」「関連事項」の十項目を提示することで、状況に応じた取捨選択を行い易くし、他校の参考になりやすい資料となっている。また、「観点別評価」を行う際に苦慮する評価方法についても、次のような例を提示している点で、具体的な有効性がある。

評価の観点	評価方法
1 関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ① 生徒の反応、発言、発表、話し合いへの参加、行動を観察し記録する。 ② ノートやプリント等を通して状況を把握する。 ③ 自己評価（カード）などによって把握する。 ④ 読書ノートや作品の提出
2 話す・聞く能力	<ul style="list-style-type: none"> ① 授業中の生徒の発言、発表、態度等を観察し記録する。 ② スピーチ、説明、ディベート及びその発表原稿やメモによって把握する。 ③ 自己評価、相互評価（カード）などによって把握する。

3 書く能力	<ul style="list-style-type: none"> ① 授業中の学習ノートの記述や課題プリントの記述を点検する。 ② 授業や家庭学習のリポートや課題文、手紙文、通知文、紹介文を点検する。 ③ 定期考査などのペーパーテスト（記述問題）の成果を見る。
4 読む能力	<ul style="list-style-type: none"> ① 授業中の観察、口頭における応答内容の程度を記録する。 ② 音読や朗読 ③ 課題プリントや課題文 ④ 定期考査などのペーパーテスト（いわゆる「読解」問題）の成果を見る。
5 知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ① 授業中の生徒の活動を観察する。 ② 提出課題等の程度を見る。 ③ 定期考査などのペーパーテスト（言語にかかわる知識等の問題）の成果を見る。

さて、この事例が汎用性の点で興味深いことは先にも述べたが、最も興味深いのは、「研究のまとめと今後の課題」に示された、次のような記述である^{注7)}。

授業改善に資する評価の在り方等を考えるに当たって、授業や評価の改善を図らなければならないという研究協力委員の考えは一致しているものの、評価についてのとらえが固まらず、研究が進まなかった事実を記しておく。

特に、評価の観点の関心・意欲・態度のとらえ、能力と知識理解のとらえが固まらなかつた。また、内容のまとまりごとの評価規準を作成する際には、「読むこと」(C領域)がまとめ辛かつたが、どのような力を付けさせたかということを明確にしないままに進めてきたこれまでの指導の在り方を反省せざるを得なかつた。

ここで指摘されている点が、まさに評価の在り方を考える際、大きな課題となる点であろう。特に「読むこと」の学力に関しては、その捉え方が教師個人個人によつて異なるものであり、「目標に準拠した評価」を行うためには是非とも明確化・統一化を図らなければならぬ学力観である。なお、ここで提示されている評価規準等は、『愛知県総合教育センター研究紀要』第九二集 (http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/kyouka/kokugo/kokugo_hyouka.pdf)¹⁾を参照いただきたい。

四、ポートフォリオ評価の可能性

ポートフォリオ評価は、「総合的な学習の時間」に用いられる評価法として知られている。この評価の特徴については、次のような解説を見ることができるといえる。²⁾

この評価の特徴は、生徒が学習活動で重要な進歩を遂げたとき自己評価した事例をファイルに入れて保存し、保

存された事例そのものが評価対象となる。ファイルに入れるものは、レポート、作品、テスト、作文などのほかに、形として残らないようなできごとを記録した用紙や写真、ビデオなどである。なぜファイルに入れることが評価として成立するのか。元来、評価とは価値を認めていることである。ポートフォリオ評価とは、つまり生徒が学習活動のなかで、これは重要な達成事項だと自ら評価して、その事例を自主的にファイルに保存する、そのことに価値を認めているのである。ここでたいせつな点は、ファイルに入れる事例について、なぜそれを入れるのかを教師が説明しながら生徒と協議(コミュニケーション)することである。このことによつて、まず生徒に学習での達成感を与え、自信を持たせたり、自分をたいせつにする心を育てるのである。いいかえれば自己効力感や自尊感情を育成するのである。

国語科の評価活動にこの特徴の活用を試みたのが、堀江祐爾氏である。氏はアメリカのポートフォリオ評価を紹介し、その具体的な活用法として、「学習成果ポートフォリオ」「展示ポートフォリオ」「蓄積ポートフォリオ」の三つに分類について解説している。³⁾

学習成果ポートフォリオ (working portfolio)

学習者はこのポートフォリオを「現在」課題となつ

ている学習成果を保存するために使う。学習者が管理し、何の中に入れて、何を取り除くかは、学習者が決める。学習者がそうしようと考えた時には、その学習成果をもう一度見たり、手を入れたりすることができる。教師は、このポートフォリオをもとに、学習の進み具合について、また、学習成果を向上させるためにどんなことが必要であるかについて、学習者と話し合う。父母との懇談の際にもこのポートフォリオが使われる。ある単元 (Project) が終わったら、教師と学習者とが話し合って、「展示ポートフォリオ」にどれを入れるかを決める。

展示ポートフォリオ (showcaseportfolio)

展示ポートフォリオは、学習者の一番良い学習成果か、ある時間のある特別な例 (パフォーマンスを含む) を示す学習成果を、教師と学習者とが展示したいと思った時に、使用する。展示ポートフォリオは、学習成果ポートフォリオから選択された学習成果が納められている。展示ポートフォリオは、学年を通して設置され、さまざまな学習成果が収録される。次年度の担任がその学習者の学習成果を見た後、展示ポートフォリオは学習者の父母に渡される。

蓄積ポートフォリオ (cumulativeportfolio)

このポートフォリオは学習者とともに進級する。学習

者の学習成果の総合的記録というよりも、むしろ長い期間に渡る成長を示すために、それぞれの学年における学習の進み具合を示すいくつかの学習成果の例が保存される。各学年の学習成果が保存されねばならない。すべての学習成果には、年月日が明示される必要がある。

更に堀江氏は、「学習成果ポートフォリオ」を短期的評価、「展示ポートフォリオ」を中期的評価、「蓄積ポートフォリオ」を長期的評価と位置づけて紹介している。

私たちが評価方法を考える際、「ポートフォリオ評価」には新たな「目標に準拠した評価」の可能性が潜んでいるように思われる。その根拠としては、次の点が挙げられよう。

- ① 自己の学習成果を学習者自身が管理することで、学習達成度を学習者が望む時に自己確認できる点。
- ② 教師が生徒の学習達成度を短期間のスパンで把握しやすく、学習者への指導助言を適時に行えること。
- ③ 教師間の、評価の継続性が保てる点。
- ④ ポートフォリオによる、保護者への評価に関する説明が明瞭にできる点。

これらの利点を活用することにより、生徒の学習意欲、保護者の評価に対する信頼、教師の効果的な指導が得られるのではないかと考える。

五、今後の展望

高等学校の国語科で「目標に準拠した評価」を実質的に行うためには、本稿で取り上げた事項以外にも、乗り越えるべき多くの難問がある。例えば、入学・就職試験で必要な「調査書」に用いる「相対評価」との兼ね合い、「観点を別評価」を行う際の数量的な困難さ等、多くの検討事項を挙げることができる。こうした課題に対して、学校として組織的に取り組むことが、今求められているように思う。

注

- (注1) 広島県立教育センター「教育評価」研修会講演記録 (H14.7.15) <http://plfrg3.hiroshima-c.ed.jp/s/oosugi.pdf>
- (注2) 国語科教育研究2『国語科評価論と実践の課題』(全 国大学国語教育学会編、1984、明治図書、p.21)
- (注3) 「小学校児童学習指導要録、中学校生徒学習指導要録、高等学校生徒学習指導要録」の改善等について (通知) (H13.4.27) 13文科初第193号 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/04/010425c.htm
- (注4) 「小学校児童学習指導要録、中学校生徒学習指導要録、高等学校生徒学習指導要録」の改善等について (通知) (H13.4.27) 13文科初第193号 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/04/010425c.htm
- (注5) 「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について (教育課程審議会答申)」(H12.12.4) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kyouiku/toushin/001211.htm
- (注6) 「高等学校国語科における評価規準、評価方法等の在り方に関する研究―国語総合―の年間学習指導計画の作成を中心に (中間報告)―」(『愛知県総合教育センター研究紀要』第92集) http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/kyouka/kokugo/kokugo_hyouka.pdf
- (注7) 「高等学校国語科における評価規準、評価方法等の在り方に関する研究―国語総合―の年間学習指導計画の作成を中心に (中間報告)―」(『愛知県総合教育センター研究紀要』第92集) http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/kyouka/kokugo/kokugo_hyouka.pdf
- (注8) 「高等学校『総合的な学習の時間』創意ある実践」(清水希益編著、文教書院)
- (注9) 「アメリカにおける〈新しい〉国語科学力評価の方法―学習者の学びの過程と成果を蓄積するポートフォリオ評価」(堀江祐爾、『国語科教育』44、全国大学国語教育学会)
- (広島県立音戸高等学校)